

國學院大學學術情報リポジトリ

物語絵巻・絵草紙を読む：
特集研究開発推進機構十周年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001740

物語絵巻・絵草紙を読む

針 本 正 行

はじめに

「古典からみる日本文化」という課題について、物語絵巻・絵草紙を読むことを通して、とくに國學院大學が所蔵する『住吉物語』を素材として述べたい。

日本文化において、いわゆる物語が絵画化されたことを示す資料として、次の『源氏物語』絵合巻の場面があげられる。

「物語絵こそ、心ばへ見えて見所あるものなれ」とて、おもしろく心ばへある限りを選りつつ描か^かせたまふ。例の月次^{なみ}の絵も、見馴れぬさまに言の葉を書き続けて御覽せさせたまふ。わざとをかしうしたれば、また、こな

たにてもこれを御覧するに、心やすくも取り出でたまはず、いといたく秘めて、この御方へ持て渡らせたまふを惜しみ領じたまへば、大臣聞きたまひて、「なほ、権中納言の御心ばへの若々しきこそ改まりがたかめれ」など笑ひたまふ。

「あながちに隠して、心やすくも御覽せさせず悩ましきこゆる、いとめざましや。古体の御絵どもの侍る、参らせむ」と奏したまひて、殿に古きも新しきも絵ども入りたる御厨子ども開かせたまひて、女君ともろともに、今めかしきはそれぞれと選り調へさせたまふ。長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、事の忌みあるは、こたみは奉らじと選りとどめたまふ。

右は、帝（冷泉帝）が絵を嗜好するので、光源氏（大臣）と、政敵である権中納言とが、それぞれ絵を整える場面である。権中納言は、「物語絵」（物語の展開をもとにした場面・人物を絵にしたもの）をはじめとして、「月次の絵」（一月から十二月までの月々の行事や風物を絵としたもの）を新たに制作させる。光源氏側の齋宮の女御の方で見たいと願っているのに、権中納言はなかなか手放そうとしないので、彼の大人げない性格が露呈することとなる。一方、光源氏は、「女君」（紫の上）とともに、厨子に所蔵していた「古体の絵」（代々収蔵されてきた古い名画）の中から、「長恨歌」（唐の玄宗皇帝と楊貴妃との恋物語を絵画化したもの）や「王昭君」（漢の元帝に仕えていた官女が胡国に遣わされた物語を絵画化したもの）などの帝と悲しく離別する物語以外を選び出し、帝に献上しようとしていた。光源氏の「古体」なる嗜好が窺われるものである。『源氏物語』はフィクションであるが、平安時代には、宮中の儀式、日本の物語文学、中国から伝来した物語などを絵画化していたと推測される。物語文学が絵画と出会ったことよって新たな文化創造をしているのである。絵画と出会った物語は、その後、どのように享受されていったのが興味深いところである。もちろん、現在、平安時代に制作された物語はなかなか発見されていないが、時代が下り、江戸時代前期、

特に寛文・延宝期に、その時代の文化の所産として、多くの絵入りの物語絵巻や、絵草紙が制作されている。その中には平安時代の物語文学を素材とした物語絵巻・絵草紙や、御伽草子を元にした奈良絵本や奈良絵巻なども見ることができる。國學院大學には、江戸時代前期に制作されたと思われる、『竹取物語絵巻』をはじめ、『住吉物語』、『異越絵』、『舟のりとく』などの多数の物語絵巻・絵草紙が収蔵されている。本日はその中から、『住吉物語』を取り上げて、日本文化の所産としての「物語絵・絵草紙」の特徴について考えてみたい。『住吉物語』についてはご存じの方もいると思うが、いわゆる継子譚、継子いじめの物語である。宮腹の母を持つ「住吉の姫君」が、七歳の頃に母宮と死別し、継母のいじめにあつて、その後、姫君を恋慕う男君がいたのにもかかわらず、乳母が出家生活をしていた住吉まで逃れていった。最後は、長谷寺の靈験によつて、姫君と男君とは結ばれて都に戻つてきて、子孫が繁栄を極めるという物語である。

一、國學院大學図書館所蔵『住吉物語』

現在、『住吉物語』は、物語としての生成エネルギーがあり、さまざまな本文を持つ『住吉物語』が確認されている。特に和歌などは数多く改められている。同じ『住吉物語』の中でも、和歌が二十首くらいしかないものもあれば、百首以上の歌が収載されているものもある。皆さんがよく手にする新編日本古典文学全集本（小学館）では大東急文庫本を用いていて、その『住吉物語』には七十数首の歌が入っている。一方、慶長古活字本を底本に持つ新日本古典文学大系本（岩波書店）の『住吉物語』には歌が四十首余りしかない。同じ作品であるにもかかわらず、それぞれの生成過程を経た『住吉物語』において、歌の言葉の力があるからか、それとも物語の力があるからか、多くの『住吉物語』

が生まれた。

その中で、國學院大學には四種類の『住吉物語』が収蔵されているので、次に簡単に書誌を示して、紹介する。

一点目は、一冊の冊子本（略号「一冊本」）である。寸法は、縦一六・四糎、横二五・九糎の横型の体裁で、その中に挿絵が二八図ある。歌数は四三首である。本文の系統は、慶長十行古活字本をもととした流布本といわれている。

二点目は、上、下、二冊の冊子本（略号「二冊本」）である。寸法は、縦一七・九糎、横二六・四糎の横型の体裁で、挿絵は上冊に十四図、下冊に十三図が載せられている。歌数は四二首である。本文の系統は、「一冊本」と同じく流布本である。

三点目は、上、中、下、三冊の冊子本（略号「三冊本」）である。寸法は、縦三一・四糎、横二四・二糎の縦型の体裁で、いわゆる大型の絵草紙（冊子本）である。料紙も雲英紙と珍しいものである。挿絵は、上冊に四図、中冊に四図、下冊に四図がある。歌数は二二首である。本文の系統は、流布本であるが、尾州徳川家本に近いものの独自異文が多く、特に末尾は諸本と異なる。

四点目は、上、中、下、三巻の巻物（略号「絵巻」）である。紙高は、縦三一・五糎で、長さは、上巻は一四・七二米、中巻は一五・〇四米、下巻は一四・六五米である。挿絵は、上巻に七図、中巻に七図、下巻に六図ある。歌数は二四首である。本文の系統は、流布本である。

それでは、四種類の『住吉物語』の特徴について末尾本文の相違を通して述べてみたい。

「二冊本」と「三冊本」の巻末の本文は、次のようにある。

さて継母見と聞く人々心あるもなきも疎みはてければあはれに破れたるい糸に明かし暮らして泣くよりほかのことはなし年月ふるままに衰へてつるにははかなくなりけりむくつけき女あさましきありさまにて惑ひありき

けるとかや人にものを思はせうしろめたかりし報ひなればむすめたちのため我がため心憂きのみにて年月送りぬるこそあさましけれ情けなき者は栄へ短く情けある人ははる／＼と栄へはんへりこれを見聞かん人々はかまひて人よかりぬへきなりとぞ（原文に適宜漢字をあてた）

継子物語の終焉として、「さて継母見と聞く人々心あるもなきも疎みはてければあはれに破れたるいゑに明かし暮らして泣くよりほかのことはなし」と、継母の後日譚が語られている。継母は、夫君の中納言の縁者から疎外され、旧邸に破れた家に暮らして一人寂しく死んでいくという。「むつけき女」の侍女も離散してしまう。このような継母について、物語は「うしろめたかりし報」であると断じる。それ故に、「情けなき者は栄え短く情けある人ははる／＼と栄へはんへり」と、人は「情け」があることがかけがえないものとし、『住吉物語』の継子物語を見聞く人は、「かまひて人よかりぬへきなりとぞ」と終わる。この物語の「とぞ」との語りおさめは、『住吉物語』が、いわゆる嫁入り本として、子女の教訓話の体裁を志向するものになっている。

「三冊本」の巻末の本文は、次のようにある。

継母は日にそへて心ほそくたえ／＼しきありさまにてことの葉もなきすまゐにてあさましとはをろかなりむすめのきんたちもあさましき継母の御心のつらさなればまことのおやといひなからむつひ給ふこともなく人聞きよろつにつけてはつかしくくちをしようおほえ給ふむくつけ女たちた、一人なりた、たなくよりほかのことはなしさすかひろきところの中にたえてこと、ふものとはあらしの風のをとはかりゑもきはかとをとちむくらはうへをあらそひてあさましとなか／＼に申もをろかなり是を見聞く人いかに心をよくもちてしひをさきとしてなさけをもつはらとしてしん／＼あるへきものなり

物語は、「継母は日にそへて心ほそくたえ／＼しきありさまにてことの葉もなきすまゐにてあさましとはをろかな

り」と、晩年の継母が一人寂しく死にゆく様や、邸の荒廃の様を比喩的な表現で語る。続いて、実の姫君たちが継母から離反したのは、「あさましき継母の御心のつらさなれば」と、住吉の姫君への仕打ちをした、継母の「つらき」性格にあったとされている。また、「さすかひろきところの中にたえてこと、ふものとはあらしの風のとはかりゑもきはかとをとちむくらはうへをあらそひてあさましとなか／＼に申もをろかなり」と、「嵐」と「あらじ」と和歌的修辞法を用いながら、あらためて、「あさまし」き継母の本性が糾弾されている。「三冊本」の語りおさめは、「是を見聞く人いかにも心をよくもちてしひをさきとしてなさけをもつはらとしてしん／＼あるへきものなり」（慈悲を先として、情を専らとして信心あるべきものなり）と、観音信仰における「慈悲」を大事にすることを、人々にすすめている。

なお、この「三冊本」と同一本文を持つ『住吉物語』が、アイerland国ダブリン市のチェスター・ピーティー・ライブラリー (CBL) に収蔵されている。CBL所蔵の『住吉物語』は、國學院大學図書館所蔵「三冊本」と同じ時期（江戸時代前期）に、同じ絵草紙屋の手で制作されたのではないかと推定している。

参考 CBL所蔵『住吉物語』の巻末の本文

ま、はは目にそへて心ほそくたえ／＼しきありさまにてことのはもなきすまゐにてあさましとはをろかなりむすめのきんたちもあさましきは、の御心のつらさなればかゝるそとてむつひ給ふこともなし人聞、よろつにつけてはつかしくくちおしうおほえ給ふむくつけ女た、一人なりた、なくより外のこともなしさすかひろきところの中にたえてこと、ふものとはあらしの風のとはかりゑもきはかとをとちむくらはうへをあらそひてあさましともなか／＼に申はおろかなりけりこれのみきく人はいかにもこゝろをよくもちてしひをさきとしてなさけをもつはらとしてしん／＼あるへし

最後に、四点目の國學院大學図書館所蔵『住吉物語絵巻』の巻末の本文について確認する。

さて継母見聞人々に疎まれ朝夕は音をのみ泣き給て世の中衰へ終にはかなくなり給ふむくつけき女はあさましきありさまにて惑ひありきけるとかや昔も今も人にはらくろなる人はかゝることなりこれを見聞かん人々はかまひて人よかりぬべきなりとぞ

「絵巻」の巻末にも、継母の後日譚が、「さて継母見聞人々に……惑ひありきけるとかや」とある。とくに、「はらくろなる人は……よかりぬへきなりとぞ」は注目される。「はらくろ」なる言葉は、古典語としては、すでに、平安時代の『蜻蛉日記』、『金葉和歌集』などにある。『蜻蛉日記』（下巻の天延二年四月条）では、兼家の弟（遠度）が道綱母の養女へ求婚をするために来訪した際に、簀子の灯火が消えていたので、道綱母が、それを知らせない遠度の姿勢に対して咎めた言葉として用いられている。また、『金葉和歌集』（恋下・五〇七）では、「はなうるしこやぬる人のなかりけるあな腹黒の君が心や」とあり、恋人の不実な性格を非難する言葉として用いられている。したがって、「はらくろ」は、古典語としてはないわけではないが、性格があまりよくない人のことを言うようである。「絵巻」でも、姫君をいじめる継母の性格を示す表現として、「はろくろ」が用いられているのである。

四種類の『住吉物語』の巻末は、嫁入り本として、それぞれ教訓的な文言を語る形で終わっている。物語は、読者に対して、継母のような「情けなき」、「はらくろ」なる本性を糾弾し、「慈悲」の心を持ち、「情け」ある精神をもって生きるようにと語るのである。『住吉物語』に内在する物語力がそれぞれの巻末表現に反映しているのだと思われる。

二、國學院大學図書館所蔵『住吉物語』の挿絵の構図

それでは、國學院大學図書館に所蔵されている四種類の『住吉物語』から四場面を選び、それぞれの挿絵の構図の特徴について確認したい。

(一)「住吉の姫君、母宮と死別する」場面の挿絵の構図

最初は、住吉の姫君が母宮と死別する場面である。「一冊本」、「二冊本」の本文、「かくてとし月をふるほとにひめ君七さいといふには、みやれいならてなやみ給ふ日をへておもくのみみえたまひければは、みや申されけるはわれなからんあとまでも此おさないもの人なみ／＼ならんふるまひせさせたまひそこときんたちにおほしおとすなと申されたれば」に相当する。重い病になった宮腹の母宮は、死を覚悟して、夫の中納言に、住吉の姫君を「他の女君と同じような扱いはするな、大臣家の男君を婿として迎えるように」と遺言を残す。「三冊本」、「絵巻」には、当該構図はない。「一冊本」、「二冊本」は、画面中央で、母宮の枕元のそばで泣いている住吉の姫君を描いている。母宮の遺言と、一人、この世に取り残される姫君を表現しているようである。『住吉物語』は継子いじめの物語であると同時に、遺言の物語としても始発しているといえる。『源氏物語』にも、朱雀帝に光源氏のことを依頼する桐壺院の遺言、光源氏に対して絶対娘（秋好中宮）には男女関係での苦悩をさせないでほしいと厳しく訴える六条御息所の遺言、大君、中君の結婚に関わる宇治八の宮の遺言などがある。遺言は、死に行く者が生きている者に対して呪縛をする言葉であり、物語の遺言は、残された者の生き方の運命を予言しているともいえる。その遺言が物語の冒頭に据えられることによって、住吉の姫君の「宿世」が前もって指示されて展開していくこととなるのである。

(二) 「住吉の姫君、住吉で念仏三昧の日々を送る」場面の挿絵の構図

住吉の姫君が、住吉で乳母とともに念仏三昧の日々を送っている場面である。「一冊本」、「二冊本」の本文、「すみよしにゆきたれはすみのえとてところにすみあらしたるにうみさし入たるにつくりかけたれはすのこのしたにうをなとのあそふもみえて（略）松の木のまよりほかけたるふねともあはちしまをゆきかふさまなみにた、よふあまをふねはかなくみえわたりて（略）ちふつたうちいさやかにつくりてあみたの三そんうつしならへて月日のいつるはかりはあま君にしにむかひてなむさいはうこくらくけうしゆあみたによらいこしやうたすたすけたまへと申」に相当する。

「一冊本」の絵は見開き一丁分の長大図で、構図は、左画面に淡路島、右画面には、浜辺に松、右端に尼となった乳母と姫君と侍女が仏画を拜んでいる様が描かれている。「二冊本」の絵も見開き一丁分の長大図で、左画面に阿弥陀三尊を拜んでいる姫君、尼君、侍女らの様が、右画面には住之江に二艘の舟、浜辺に松が描かれている。「三冊本」も見開きの長大図で、櫓の上で、尼、姫君、侍女たちが遠く淡路島を眺める様が描かれている。「絵巻」では、右の上の方に山、その山の間に住吉大社が、住吉信仰の賜物として描かれている。左に、姫君、侍女、尼、床の間に仏画、仏具が描かれている。

『住吉物語』「一冊本」、「二冊本」、「三冊本」、「絵巻」の構図を比較したが、それぞれ絵師の意図により構図が違ふようである。とくに、住吉大社を構図に配した「絵巻」は住吉信仰を非常に意識しているものということになる。

(三) 「住吉の姫君、初瀬に詣でた中将の君の夢に現れる」場面の挿絵の構図

次は、長谷寺で参籠している男君が、夢に住吉の姫君と出会う場面である。すでに男君は継母の子と騙されて結婚をしていた。しかし、継母の策略から逃れるために都からいなくなっていた姫君を探すために、男君は長谷寺に参籠をする。参籠して七日目の朝、男君の夢に姫君が現れたのである。「一冊本」では、画面左に顕現した姫君が立ち、

その前に眠っている男君、左手前に眠っている二人の従者たち、画面右手前には、長谷寺を象徴する鐘楼が描かれている。「二冊本」は、画面左に顕現した姫君、画面中央に眠る男君、画面右に居眠りする一人の従者が描かれている。そのときの夢の中の対話を、「二冊本」の原文で確認する。姫君が、「かくまてとはおもはさりしをいとあはれにそといひていまはかへりなむ」（こんなにも私のことを思っていてくださるなんて知りませんでした、ありがとうございます、でもこれからすぐに帰らなければなりません。）と言ってお立ちになる。そこで、男君が、「袖をひかへて」（女君の袖をとらえて、是非ともあなた様が今いらつしゃるところをお教えください。）とお願ひした。女君は、「わたつみのそのこともしらすわひぬれはすみよしとこそあまはいひけれ」（私は今住吉と海人が言っている場所にいますよ）と和歌で答えてかき消えてしまったのである。霊夢により、男君は、姫君が住吉に知っている場所を知るようになる。長谷寺の観音の霊験によって二人の再会が成り立つということでの挿絵があるのである。「三冊本」には、当該の図は剥ぎ取られたのか、現在は残っていない。「絵巻」では、回廊で馬に乗った誰かがいるものの、誰一人として寝ている人はいないなど、不思議な画面構成になっている。『住吉物語』だけではなく、物語絵本、絵巻が夢の場面をどのように絵画化しているのか、興味深いところである。

（四）「住吉の姫君と中将の君、結婚し、一族が繁栄する」場面の挿絵の構図

最後の場面となる。「二冊本」、「三冊本」の本文、「とし月ゆくほどに大しやう殿にはくはんはくゆつり給ひめいよく／＼すゑの世たのもしくそはんへりけるわか君はけんふくせさせたまひて三みのちうしやうにとそ申けるひめ君は十八にて女御にまいり給ひけるし、うはおとな女にてよろつに大事のひとにそおもはれてないしになりぬみきく人うらやみあへり大しやうひめ君すゑまではんしやうめてたくそおはしける」に相当する。大将（男主人公の中将の君）は父君の後を継いで関白となり、住吉の姫君との間には若君と女子が生まれて、女子は天皇の女御となり、若君は元服

して三位の中將に就くという大団円で終わっている。「一冊本」では、主人公の住吉の姫君と大將は画面上部に、画面右上には小さく描かれた若君、画面左にも女君が小さく描かれている。若君の元服の儀の図だろうか。「二冊本」は、大將が画面中央に、住吉の姫君が画面右に、その両隣に若君と女子が描かれている。「三冊本」では、画面中央に大將、その右に住吉の姫君、男子と女子は、すこしわかりにくいのだが、左手前の小さな若君、右手前の小さな女子と推測される。「絵巻」においても、中央画面右上に大將、その左に住吉の姫君、手前上に若君と女子が描かれている。しかし、女御として入内している女子、三位の中將に就いている若君が、極端に小さく描かれているのは不思議である。また、物語の展開上は関係のない松の木が画面左に大きく描かれている。いわゆる嫁入り本の伝統として、松は永遠なる祝儀性を象徴している。

なお、祝儀性には相応しくない、物語末尾の「さて継母見と聞く人々心あるもなきも疎みはてければあはれに破れたるいゑに明かし暮らして泣くよりほかのことはなし年月ふるまゝに衰へてつゐにははかなくなりけり」（「一冊本」・「二冊本」）の内容は絵画化されていない。

三、國學院大學図書館所蔵『住吉物語』「三冊本」の印記

國學院大學図書館所蔵『住吉物語』「三冊本」の上冊・中冊・下冊の末尾にはそれぞれ同一の印が捺されている。このような印記を持つ奈良絵本は、ポストン美術館所蔵『天狗の内裏』二軸、フリーア美術館所蔵『玉藻の草紙』二軸、慶應義塾大学図書館所蔵『友長』二軸、富美文庫所蔵『大職冠絵巻』など、全世界で十点余りが確認されているだけである。國學院大學図書館には、『住吉物語』「三冊本」以外に、印記を持つ古典籍として、『かくれ里』二軸、『判

官都ばなし絵巻』一軸がある。

では、『三冊本』の『住吉物語』の上、中、下の最末尾にある印記から確認する（論文末の図を参照）。

上下に印が捺してあり、上部に、陰刻二行「源小泉 大和大極」、下部に陽刻三行「烏丸通櫻馬場町 御繪雙紙屋大和大極」とある。この印記は、京都の烏丸通に構えていた絵草紙屋、屋号は「大和大極」であり、「大和」は、もともと奈良の大和国出身で京都に出てきたことを示唆しているのではないだろうか。

『かくれ里』には、各巻末左下隅に、陰刻「源小泉／大和大極」の印が捺されている。これは『住吉物語』『三冊本』の印記と同じものである。

『判官都ばなし絵巻』には、巻末に、上下に印が捺してあり、上部に朱円印で「小泉」、下部に朱方印で「藏寶藏七左衛門尉 安信」とある。これと同一のものが『古畫備考』（江戸時代末期に刊行された画人伝）に掲載されている。「安信」は狩野安信という狩野派の絵師だと推測される。狩野安信は一六一四年から一六八五年に活躍した絵師であるから、その「安信」があり、上部に方印で「小泉」とあり、下部に壺型印があり、その左隣に、「七左衛門尉 安信」となっていて、上部の中央は「寶」、右側は藏書印を示す「藏」、左側も「藏」で、「藏寶藏」と捺している。今日は『かくれ里』と『判官都ばなし絵巻』は展示していないが、國學院大學図書館所蔵『かくれ里』二軸と國學院大學図書館所蔵『判官都ばなし絵巻』一軸は、料紙が金泥草花紋様下絵入斐紙、上下に金箔砂子、一紙の寸法が縦凡そ三十二糎、横凡そ四十八糎、一行の字数は十二字前後と、江戸時代前期（寛文・延宝期頃）の大型物語絵巻の体裁を有している。同一の印記、同一の体裁を持つことから、國學院大學図書館所蔵『住吉物語』『三冊本』は、國學院大學図書館所蔵『かくれ里』二軸・國學院大學図書館所蔵『判官都ばなし絵巻』一軸とは、同じ繪雙紙屋で制作されたものと思量される。

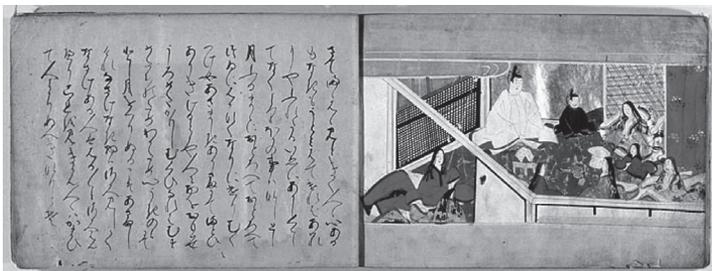
國學院大學の『住吉物語』「三冊本」の各冊末尾の印記は、当該古典の制作集団、制作時期、挿絵の絵師を解き明かす重要な手掛かりになるものといえる。

おわりに

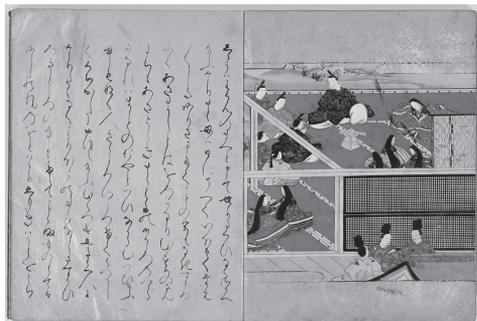
本日は、「古典からみる日本文化」との課題のもと、國學院大學図書館に所蔵されている四種類の『住吉物語』を対象として、江戸時代前期頃に、日本文化の所産として古代の物語である『住吉物語』が、どのような本文を展開し、どのように絵画化され、どのような繪雙紙屋で制作されたのか、どのように読まれていたのか、などについて私見を述べた。古典籍、日本文化に対峙したとき、皆さん、お一人お一人の思考、読み取りがあるのではないのでしょうか。あらためて、博物館に展示されている古典籍を実見し、実感していただければ幸いです。

國學院大學図書館所蔵『住吉物語』の最終場面の挿絵の構図

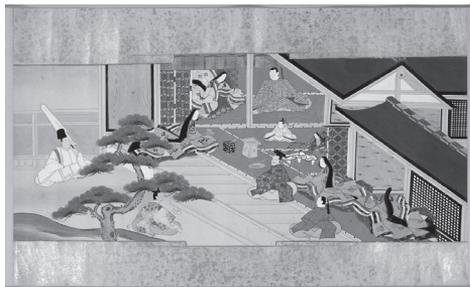
「二冊本」の最終図



「三冊本」の最終図



「絵巻」の最終図

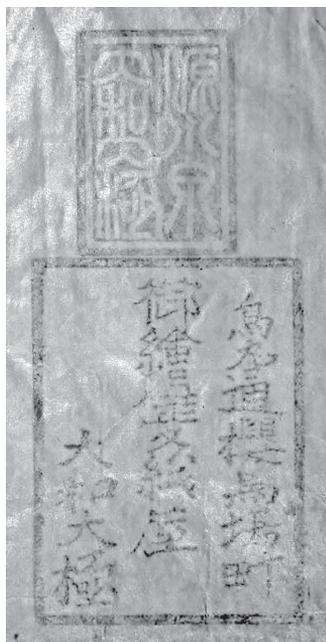


刊本
最終図



國學院大學図書館所蔵『住吉物語』「三冊本」の印記

(一) 國學院大學図書館所蔵『住吉物語』「三冊本」の印記



(三) 國學院大學図書館所蔵『判官都ばなし絵巻』の印記



(二) 國學院大學図書館所蔵『隠れ里』の印記



(四) 『古畫備考』

